

# 福大医学部



「まごもな事」と「自由」

高木忠博(十五回卒)文責

母校は、入試制度について行政と中学校長会に対しdebate中です。新聞も紙面を割いて大きく報道しているようです。15歳は、昔「元服」と言う成人式の年齢ですが、現代人の成熟度はそこまで行きません。しかし、人生に大きな影響を及ぼす大切な出来事が、高校入試である事は間違いありません。従って選択の機会を増やす事は、至極当然の発想と申すのです。中学浪人を減らす為とか言う理由で選択肢を行政が狭めていくのは何処か「機会の平等」と言う自由主義の精神に反している様に思えます。今の日本社会は泣き寝入りや「無関心」と言う暴力が普通に罷り通る社会になってしまいました。その延長にこの問題はある様に思います。福岡県市の入試システムの不自然さを子供達や父兄の立場から堂々と指摘し、毅然と教育人として入試改革を単独でも断行された家宇治校長をはじめ母校教職員の英断に卒業生として強い誇りを感じます。日本の多様性を嫌う風土の中では非難も有るようですが、全く最初の発言から軸が振れることなく信念を持って実行に移した行動力に大濠らしさを感じます。子供の数が少なく豊かな社会であるならば、普通に考えるならば子供の選択肢は当然増える。と考えるのがまごもな考え方ではないでしょうか。しかし現在の入試システムは、少ない子供を教育業界の中でどの様に人数をsharingして行くか?と言う低い次元の発想が上位にランクされている様で福岡システムの怪しさを感じます。それも「法制化」と言う公的なテクニックを使って学校間の本来の質的競争を最小限にしながら人数確保だけを目的に達成すると言う含みを感じます。人間の歴史の中で「人に何かを提供しよう」と思い立った時には、提供を思い付いた人間側の間に「競争原理の必然」は自然に生まれた現象

だと考えられないでしょうか。最近のトレンド言葉で「競争原理」が云々ナンテ言うていますが「元々人類の進歩や文明と言うのは、人間が本能的に持つ「競争心」によって生み出された結果なのではないでしょうか。福岡市内の中等高等学校教育は、公立が主体でその下請けを私立がする。と言うのが暗黙の約束になっています。国家百年の計。と言われる「教育」に本家も下請けも無いと考えるのが「まごもな考え方」ではないでしょうか。「民主国家」と言う漢字がありますが意味は「民が主の国家」と書いてあります。しかし日本語の中では「公私」「官民」と書きませんが、何故か?お上言葉がソコと分らないように先に表現されています。細かい事は、昔から言葉は文化と言います。言葉はその国の基本的思想をも表現してしまつたのでしよう。民主国家の母国語訳ならば全部逆の「私公」「民官」になっていると思うのです。が微妙なバイアスが掛かっているようです。又日本では自由について、自由には義務と責任が伴う」と普通言います。何となく義務と責任が自由に従属する様な表現が市民権を得ています。しかし本場の欧米自由主義の解釈は、「義務と責任を果たせる人間が、初めて自由の意味を解釈でき獲得できる。」と解釈の上では言葉の主従が逆のように思われます。ですから英国パブリックスクールでは学校が出す生徒に厳しい「義務と責任」に対して実行出来た事を生徒が実感出来る様に又それを自分で履行出来る様になる事が、自分の将来の為になる事を生徒自身が理解出来る様に細かい芯の有る教育カリキュラムになっていると聞きます。これを何度も反復練習して人間の自然な素養になるまで体に染み込ませて行くそうです。授業料も当然高くなりますが話しを聞いていて流れが非常に自然な感じがします。米国は、日本と同じ自由の解釈方針で米国式教育カリキュラムを施行しましたがこの教育方法での荒廃を経験し20年くらい前から教育大改革を始められています。改革と言っても元に戻しただけです。しかし、その効果がクリントン政権時代の好景気を基礎で大きく支えた。と

の分析論文を読んだ事があります。思い返してみると大濠には昔から「この「義務と責任」については学問より特に厳しく(ピンタを含め)教職員が生徒に要求する雰囲気(学校の中に自然に有った様に思えます。その空気が大濠は硬派!といわれていた所以かもしれません。真の「自由」の解釈を男子教育の理念に持つて最も多感な時期の成長をシッカリと受け止め「義務と責任」から逃避しない腰の据わつた男子生徒を排出する私立進学教育機関として母校が堅実な「ONLY ONE」の成長をして行く事を期待し応援したいと思えます。

## 粕屋・古賀支部



連絡先 古賀市久保 547-110  
松本定由 092-942-6165

私たち大濠高校粕屋地区古賀市支部は、平成12年9月2日(日)支部結成を致しました。松本定由支部長(第7回卒)以下206名の会員を擁しています。

平成11年11月18日(土)福岡市博多区八仙間に粕屋地区支部の発会式が挙行され、太田健策会長(粕屋町)以下1市7町の各支部を構成とするもので、古賀市支部の結成が急がれていたところです。

ここで、私たちが住んでいます古賀市のご紹介をさせていただきます。本市は、平成9年10月1日市制施行し、県下24番目の市が誕生いたしました。白砂青松緑にあふれた田園都市の反面、県下7番目の工業製品出荷高を誇る工業都市であります。

人口は、平成15年12月末で約57,000人。まだまだ人口増が見込まれているところです。

この急速な人の流入により、新興団地が増加し、新旧住民の融和がまちづくりの課題になっています。

そういったまちの事情とあわせるように、大濠高校出身者も急増し、名簿上は、200

名を超えておりますが、いままで市内での各卒業生間の交流もなされているか定ではありませんでした。

古賀市支部の結成を期に、今後は支部会員の各世代間の連絡を密にし、年1回は会を開催し、親睦を深め、もって母校のより一層の発展は勿論のこと古賀市の発展に寄与できたらと思えます。

今後とも同窓会本部役員の皆様、粕屋地区会長その他諸先輩方のご指導・鞭撻をよりしくお願いいたします。

### 廣畑氏(1期生)母校で講演

平成六年一月七日、大濠高等学校の総合的な学習の授業で、高校第一期生廣畑富雄氏(九州大学名誉教授、福岡西口夕リクラブ会長)が講演を行った。

演題は「海外から見た日本 若い人たちに伝えたいこと」。同氏は本校卒業後、九州大学医学部、ハバード大学大学院で、癌の研究(予防)に従事。ハワイ大学教授、ハバード大学客員教授や国際連合高等科学専門官時代の海外経験を踏まえて、日本の若者がどのような針路を目指すべきかを高校全学年生徒に説いた。

特に、日本の常識が海外の認識とずれている事実の指摘、感謝の気持ち、礼儀、責任感、自然体験(創造性(イノベーション))の大切さを実例を交えて説明し、後輩諸君に伸びてほしい」と訴えた。生徒からの質問のつ、先生の夢は何ですか?に対しては、「このままでは日本は滅亡する。日本を変えるために尽力すること」と力強く結んだ。

今年度の総合学習では、昭和五十二年本校に留学生として在籍したマクホア氏(オーストラリア大使館駐日武官)も二月五日講演した。